

博士学位申請論文審査報告書

坂口可奈「シンガポールにおける国民統合：  
包摂と排除の観点から」

坪井善明(委員長) (ヴェトナム政治)  
都丸潤子 (英国植民地政治)  
山崎眞次 (ラテン・アメリカ比較政治)  
岩崎育夫(拓殖大学国際学部教授：  
シンガポール政治)

はじめに：

2014年10月2日10時から12時まで、早稲田大学11号館916号室において坂口可奈氏が提出した博士論文「シンガポールにおける国民統合：包摂と排除の観点から」の審査委員会が開催された。この報告は、その審査委員会で検討審議された概要を報告するものである。

坂口可奈氏は2006年4月から「東南アジアの政治と社会」という東南アジアを主要な研究対象地域とする坪井ゼミに参加してきた。シンガポールに知的な興味を抱き、数多く現地にも赴いた。そして、卒論もシンガポールを研究対象とした。その後早稲田大学大学院政治学研究科に進学して修士論文を執筆したが、一貫してシンガポール政治研究に従事してきた。この意味では、今回の博士論文は過去8年間のシンガポール政治研究の総決算という性格をもつものである。

#### (1) 研究視角・作業仮説

坂口氏の説明によれば、シンガポールでインドネシアから来たキリスト教を信仰している少数民族のトバ・バタックという民族の人たちに出会えて友人となったことが、この博士論文の分析の切り口の一つを決める契機になったという。すなわち、トバ・バタック族がシンガポールに定住申請をする段になると、シンガポールの「多人種主義」の基準の華人（中国人）、インド人、マレー人という三分類によると、インドネシア人はマレー人の範疇に入れられて、イスラム教徒という分類をされる。トバ・バタックの人が自分のIDカードを見ると、「マレー人でイスラム教徒」ということになるので、大変な違和感を持つという。これは、多人種主義というシンガポール神話の一つが、イギリス植民地遺制の「人種」による範疇分けが、エスニシティレベルまで掬（すく）うようなきめ細かい分類になっていないという欠陥があることを示していると考えた。そこで、神話の一つの「多人種主義」の歴史と実態を細かく調べることにしたという。

他方、シンガポールで肉体労働を担うバングラデッシュ人などの移民労働者との出会いも、他のもう一つの分析視角を提供する契機となったという。シンガポールでは移民は外国人高度人材（Foreign Talents）と外国人労働者（Foreign Workers）に分類され、シンガポール国家の運用に有益と見なされる外国人高度人材は割と簡単に国籍や市民権を取得できるのに対して、景気の調整弁の役割をもつ外国人労働者はほとんど国籍を取得することは許されず、外国人として常に扱われているという。この点から、シンガポール神話のもう一つの「能力主義」を全面的に再検討する契機となったという。

つまり、シンガポール政治社会体制のいわば「弱者」という位置に身を置き、いかなるメカニズムで「包摂される」のか、また「排除される」のかという観点から二つのシンガポールの建国神話の「多人種主義」と「能力主義」を検討し、それに加えて現代のシンガポールの「社会福祉政策」と「外国人労働者問題」を吟味することで、シンガポール政治体制のメカニズムの効用とその限界を見通せることになるのではないかという作業仮説を立てたという。

## (2) 論文の構成

坂口可奈氏の博士学位申請論文「シンガポールにおける国民統合・包摂と排除の観点から」は、A4横書きで208頁、およそ20万字からなる研究である。構成は以下の通りである。節以下の項目は省略する。

### 序章

- 1、問題の所在
- 2、研究の目的
- 3、方法と分析視角
- 4、先行研究
- 5、本論文の構成
- 6、用語の説明
- 7、シンガポールという国

### 第一章 シンガポール概史

- 第一節 新しい都市国家
- 第二節 生き残りへの道

### 第二章 シンガポールにおける「多人種主義」

- 第一節 「多人種主義」(Multiracialism)
- 第二節 「多人種主義」再考

### 第三章 シンガポールの能力主義(メリトクラシー): 起源とその機能

- 第一節 能力主義(メリトクラシー)
- 第二節 能力主義がもたらしたもの

### 第四章 能力主義のメダルの裏側: シンガポールの社会保障体制

- 第一節 シンガポールの社会保障の理念
- 第二節 政府による社会保障と援助
- 第三節 民間部門による社会保障と援助

### 第五章 外国人とシンガポール

- 第一節 外国人人材との関わり
- 第二節 外国人人材と国家建設

### 終章 国家建設から国民統合へ

### 参考文献

本論文は、シンガポール共和国の国家建設に焦点を置いた地域研究である。シンガポールは、イギリス植民地時代を経て、1965年にマレーシア連邦から独立した。同国は、リー＝クアンユ(李光耀/ Lee Kuan Yew) 初代首相(1965-1990)、第二代首相(1990-2004) ゴー＝チョクトン(吳作棟/ Goh Chok Tong)、第三代首相(2004-現在) リー＝シェンロン

(李顯龍/ Lee Hsien Loong) の下で経済発展を遂げ、現在では一人当たりGDPアジア第一位の国となっている。経済面では、成功した国といってよい。また、公的には華人、マレー人、インド人、その他の「人種」から構成される多民族国家でありながら、表面上は民族対立が見られない特異な国家である。さらに、外国人人材や移民を多く受け入れる移民受け入れ国家でもある。このような状況のシンガポールは、与党人民行動党 (People's Action Party) の一党支配のもと、政治的にも安定した国家を維持している。

しかし、社会に目を向けると、経済発展から「置いて行かれた人々」や、人々から認知されないマイノリティ民族が存在する。本論文は、こうした人々に焦点を当て、シンガポールにおける国家建設の脆弱性を明らかにしようと試みている。

従来のシンガポールの国家建設研究は、国家や制度に着目したものが多く、人々や社会という観点に乏しかった。また、外国人人材を国家建設の外にいるもの(「他者」)として扱っていた。このような先行研究とは異なり、本論文は社会や人々に焦点を当て、外国人人材という観点を加えて包括的に政治・社会のシステムを分析している。

本論文は、序章、第一章から第五章、そして終章で構成されている。

まず序章では、シンガポール社会と経済状況が概観され、与党人民行動党の求心力低下とシンガポール社会の潜在的な不安要素が指摘されている。シンガポールは、多民族国家としての側面、能力主義国家としての側面、移民受け入れ国家としての側面という三つの顔を持つ。多民族国家としては「多人種主義」を中心とし、能力主義国家としては能力主義を中心としている。2012年の名目GDPは65,048シンガポール・ドル(52,052USドル)で、アジア第一位、世界でも第九位であった。国際競争力も強く、2013年度の国際競争力ランキングでは、144か国中第二位となっている。経済は好調であるかのように見える。

しかし、政治・社会には、以前は観察されなかった動きが表れている。2011年の総選挙において、人民行動党は87議席中81議席しか獲得することができなかった。さらに、得票率も過去最低を記録した。また、2013年二月には移民に反対するデモが発生した。

本論文は、これらの出来事をシンガポール政治・社会が以前から抱えてきた潜在的ではあるが根本的な問題が顕在化したものだとみなしている。次章以降では、この問題と構造を解明するため、「包摂と排除」という分析枠組みを使用し、「多人種主義」と能力主義、そして外国人人材というシンガポールの三つの要素から分析している。

第一章では、テマセックと呼ばれていた時代から1965年のシンガポールの歴史が概観されている。ここでは、「多人種主義」と能力主義が国家神話として神聖化された理由と外国人労働者を導入した理由が明らかにされている。

独立前のシンガポールは、様々な国や地域から移住した人々が居住していた。彼らは互いに関わることがほとんどなく、自分たちのコミュニティの中のみで生きていた。そのため、彼らはシンガポール人としての意識を持っていなかった。さらに、天然資源もなく、国内市場も小さかった。こうした状況を抱えながら、シンガポールはマレーシア連邦から

分離独立することとなる。

分離独立は、シンガポールの置かれた状況を一変させた。広義のマレー人が多数を占める東南アジア島嶼部において、シンガポールは唯一華人が多数を占める国家である。当時の国際状況は、シンガポールが華人国家となることを許さなかった。さらに、1964年の「人種」暴動に代表される国内の華人とマレー人の対立は、シンガポールに社会不安をもたらした。社会不安は、外国投資を遠ざける。そのため、シンガポールの生き残りのためには、「人種」間対立を防がなければならなかった。こうした国際的背景と国内的背景のもとでは、シンガポールは華人国家ではなく多民族国家であり、それぞれの「人種」を平等に扱うという意思表示が必要であった。これが、社会を安定させる役割を持つ「多人種主義」である。

また、独立直後のシンガポールは、多くの失業者を抱えていた。この時期のシンガポールは国家としての存続さえ危ぶまれる状況であった。そこで、リー＝クアンユを始めとする第一世代の指導者たちは、国家の生き残りのためには、外国からの投資と人的資源に頼る経済発展しかないと考えた。こうして、能力主義が導入され、外国人や外資を受け入れたのである。いわば、「多人種主義」も能力主義も、そして外国人人材も、経済発展、ひいては生き残りのためであった。

第二章では、「人種」のサブカテゴリであるエスニシティに焦点を当てて、「多人種主義」の構造と脆弱性を明らかにしている。もともと、シンガポールは現在よりも民族的に多様な土地であった。しかし、独立後、彼らは教育や言語、住宅政策を通して四つの「人種」に組み込まれた。

現在のシンガポールでは、多くの人々は「人種」としてのアイデンティティを持ち、「人種」としての共通性も持っている。しかし、本論文は、「人種」アイデンティティに一致しないアイデンティティを持つエスニシティとして、インドネシアからの移民でキリスト教徒のトバ・バタックを例にあげている。トバ・バタックは、シンガポールの人々に認知されず、政府からの保護も受けていない。また、彼らは、キリスト教徒であるために、ムスリムが多数を占めるマレー人とみなされることに違和感を覚えている。本章では、彼らトバ・バタックやユーラシアン、タミル・ムスリムなどのエスニシティに焦点を当てて、「多人種主義」を理論的に分析し、その脆弱性を明らかにしようと試みている。

まず、「多人種主義」は公的空間1、公的空間2、私的空間という三つの空間を作り上げる。公的空間1とは、外国人と関わる場合の空間である。ここでは、シンガポールの人々は、外国人との対比で「シンガポール人」としての意識を持つ。公的空間2とは、他の「人種」のシンガポール人と接する場合の空間である。自分以外の「人種」に属する人々との対比により、シンガポール人は「人種」としての意識を持つ。たとえば、マレー人と接したとき、シンガポール華人は、華人としての「人種」アイデンティティが強く表されるといえるものである。私的空間とは、家族や親しい友人といる場を示す。ここでは、エスニシティの母語が使用され、文化もまた「人種」文化とは異なる場合もある。

本論文はそれぞれの空間の関係を多文化主義理論を用いて分析している。ここでは、シンガポールにおいて、私的空間と公的空間（1、2）の間はリベラル多文化主義型となり、公的空間1と公的空間2の間はコーポレート多文化主義型となると主張されている。リベラル型の公的空間では、個人的側面（民族、宗教や言語など）は考慮されない。一方、コーポレート型では、公的空間においても民族的要素が考慮される。

シンガポールでも、エスニシティの文化やアイデンティティは公的空間（1、2）では考慮されずに、「人種」として扱われる。一方で、公的空間1において、「人種」は言説の上では平等に扱われ、住宅や教育、言語政策は「人種」的差異を考慮して行われる。

つまり、シンガポールの「多人種主義」は、三つの空間を構成し、二つのメカニズムを持つ複雑な構造となっているのである。この構造の下では、エスニシティは私的空間に押し込まれる。公的空間で彼らのアイデンティティや文化が認められることはない。いうなれば、彼らは公的空間から排除されているのである。

この排除は、「四つの多様性」という一元的価値観に基づいたものであった。一元的な価値観の下での三層構造と二つのメカニズムは、「多人種主義」の特徴でもあり同時に、脆弱性でもある。すなわち、「多人種主義」は、四「人種」以外の民族的多様性に対応することができないのである。

第三章では、能力主義について論じられている。シンガポールは、人的資源を発掘、育成するために、能力主義を採用した。経済発展に貢献したという点では、能力主義は推進の役割を持っている。現在では、繰り返しの試験と能力によってコース分けされた教育により人的資源は選抜、育成されている。繰り返しの試験を勝ち抜いたエリートは給料のみならず、昇進のスピードも大衆とは異なる。エリートは、高収入を得て、高い社会的地位につく。一方で、競争に負けた「敗者」や競争に参加さえできなかった人々は、低収入状態に置かれている。

エリートの選抜について、女性やマイノリティ「人種」に対するガラスの天井が存在することや、社会経済的背景が学歴に影響することは、既に先行研究で指摘されていた。本論文は、さらにもう一つの問題を指摘している。すなわち、学歴とそれに基づく収入という一元的価値観である。つまり、能力主義が社会に浸透した結果、学歴と収入以外の成功が認められなくなっているというものである。成功の定義が限定されているため、人々の逃げ道や精神的な救いは存在しない。これが、本論文で指摘されている能力主義の脆弱性である。

第四章は、第三章とセットとして扱われている。ここでは、弱者を救済すべき社会保障システムが分析されている。シンガポールの社会保障は、中央積立基金という強制自己貯蓄制度を中心とする。また、援助が必要な人々のための政府援助機関としては、コムケアがある。政府によるこれらの社会保障は限定的である。そのため、民間の援助団体が政府援助の穴を埋めている。しかし、彼らも財源を政府の補助金に依存しているために、政府の意向に反した援助を行うことができない。

シンガポールの社会保障の中心となる概念は、「自立」と「多種多様な支援」である。「自立」とは、自らの生活は基本的に自らが責任を持つものであり、これを維持するために最大限の努力を求めるというものを示す。「多種多様な支援」とは、政府のみならず、より多くの人々や機関が援助を行うことを示す。ここでは、政府は援助の担い手の一つに過ぎず、援助の責任を持つものではない。基本的には自己の努力、次に家族、コミュニティ、そして最後の手段として政府援助が位置付けられている。

これらの概念の下での援助は、人々に対して時に過大な努力を要求する。シンガポールは、福祉ではなく勤労福祉を基本とする。働くことのできない人々、または構造的理由により弱者となった人々を想定していない。そのため、シンガポールにおいては、社会保障は弱者を包摂するものではない。むしろ、競争の「敗者」や弱者は排除されているのである。

第五章では、外国人人材がシンガポールに与えた影響を論じている。シンガポールの外国人人材は、高スキルを持つ外国人高度人材と低スキルの外国人労働者とに分けられている。高度人材は、シンガポール政府や企業に優遇され、高所得を得る。一方で、外国人労働者は、「使い捨て」とみなされている。

独立以来、シンガポールは外国人人材を受け入れ続けてきた。その結果、現在では人口の三割を外国人人材が占めている。彼らは、シンガポール経済に大きな影響を与えてきた。外国人高度人材は、シンガポールに刺激を与え、最新の知識や技術をもたらすものとして扱われてきた。一方で、外国人労働者は、シンガポール人が避ける3K職に就き、雇用の需給を調整している。いわば、外国人人材は、経済発展のための道具として扱われてきたのである。

しかし、本論文は、経済のみならず、外国人人材を国家建設にも影響を及ぼす存在としてとらえている。本章では、彼らが「多人種主義」と能力主義に与えた影響を分析することで、国家建設への影響を解明しようとする。

90年代後半以降、シンガポールは知識ベース経済に対応するために、外国人人材の受け入れを増加させた。受け入れ増加は、すべての社会階層において職の獲得競争を激化させた。以前は、学歴によって、ある程度は将来の収入を予測することが可能であった。しかし、現在、競争相手の人数と質は変化している。そのため、以前の指標は通用しない。この点では、能力（シンガポールでは学歴で表される）に基づく報酬という能力主義の基本原則が機能不全を起こしている。しかしながら、一元的な価値観を持つシンガポール社会では、学歴と収入以外の成功の定義はない。他の分野で評価されることが難しいため、人々の不満は増大する。逃げ道がないという能力主義の脆弱性は顕在化しているのである。

また、外国人人材の増加は、四「人種」に分類できないエスニシティを形成する。たとえば、フィリピン人メイドである。彼女たちは、個人としては二年間でシンガポールを離れるが、フィリピン人という集団で見た場合は長期間にわたってシンガポールに存在する。実際、彼女たちのコミュニティも形成されている。しかし、シンガポール人でも永住者で

もないために、フィリピン人コミュニティは四「人種」には分類されない。

さらに、「人種」内の多様性は増大している。シンガポール華人は、「人種」としてのアイデンティティや共通性を持つ。しかし、新移民の華人や外国人高度人材の華人はシンガポール華人が持つ「人種」意識や共通性を持たない。そのため、「人種」内の差異が増大している。この差異は、時に新移民への反発という形を取って現われる。これは、言説上では一枚岩だった「人種」概念が形骸化していることを示している。ゆえに、外国人人材は四「人種」以外の多様性に対応できないという「多人種主義」の脆弱性を顕在化させたとと言える。

以上の議論から、終章では、シンガポールの国家建設における脆弱性と今後のシンガポールが採るべき道が示されている。

まず、社会保障と外国人人材という観点を加えて、「多人種主義」と能力主義という二つの国家神話を包摂と排除の枠組みから分析した結果、現代シンガポールの問題点が一層明確になった。すなわち、経済発展を基軸とする国家建設には成功したが、いまだに国民統合は完成していないというものである。

結局のところ、シンガポールは「四つの多様性、一つの成功」という一元的価値観に基づいて国家建設を行ってきた。この一元的価値観は、「効率的」な経済発展には有用であった。社会もまた、一元的価値観を受け入れた。特に、成功の定義に関しては、社会は自己規定的に一元性を強化した。こうして、シンガポールは経済発展のために一元的な価値観に合わないもの、合わない人々を排除してきた。

人々が経済発展の恩恵を実感できた時代は終わりを迎えた。さらに、知識ベース経済に移行するにつれ、「他者」たる外国人人材が増加した。これらの要因が、一元的価値観に支配された社会のほころびを顕在化させたのである。包摂と排除という枠組みから、大衆に焦点を当てて国家建設を問い直したとき、現代シンガポールが抱える問題がより鮮明に浮かび上がる。シンガポールは、生き残りのために一元的価値観の下で経済発展を追い求めた。その過程で、弱者は排除されてきた。結果、生き残りのための経済発展とそれによって生み出された弱者は、シンガポールの生き残りの阻害要因へと変化したのである。

本論文は、最後にシンガポールのとるべき道を示している。シンガポールは、もはや物質的な経済発展だけでなく、豊かな社会を構成する時期にいる。つまり、シンガポール独自の文化が花開く社会、人々がそれぞれ満足できる社会、外国人人材を含む全ての人々が排除されない社会である。これを可能とするものが、国家神話の機能転換である。

社会の安定のための役割を持っていた「多人種主義」を、文化的な意味での推進の役割とする。これによって、多様なエスニシティ文化が認められるため、豊かなシンガポール文化の土台とすることが可能となる。また、外国人人材を経済発展のための道具ではなく、文化の担い手としてとらえ直すことで、彼らの包摂のための第一歩となる。

そして、経済の推進役としての役割を持っていた能力主義を、安定の役割を持つものとする。すなわち、人々を排除しない多元的な評価軸の導入である。これによって、包摂され

る人々の範囲を拡大することが可能となる。

シンガポールは現在の「四つの多様性、一つの成功」という一元的価値観から、「多様なエスニシティ、多様な成功」へと価値観を変換すべき段階にいるのである。

### (3) 論文に関する質疑応答

審査における質疑応答の抜粋を以下に述べる。まず、岩崎育夫教授からは、本論文で使われる **race** の訳語について質問があった。日本のシンガポール研究者の中には、**race** の訳語を種族とし、**multiracialism** を種族融和政策と訳す傾向がある。しかし、本論文ではそれぞれ「人種」、「多人種主義」と訳されている。これに対し、坂口氏は、以下のように答えた。「シンガポールにおける **race** がイギリス由来の概念であることを加味し、他の旧イギリス植民地研究では人種と訳されるということ、日本のシンガポール研究者にも人種と訳す研究者もいること、そして種族融和政策が **multiracialism** の持つ **race** 分断という要素を加味していないことを挙げて「人種」と訳すとした。さらに、現代世界において **race** という語の持つ否定的インプリケーションとは区別するために、「」をつけて「人種」「多人種主義」と表記した。」

また、国家建設に影響を与えるアクターとして外国人人材を取り上げた点に関して、岩崎教授からは、「シンガポール政府の政策は政治やシンガポールの在り方から外国人を隔離して、経済的に労働力として利用することが外国人人材に関する政策の主眼なのではないか」という質問があった。これに対し、坂口氏は、「シンガポール政府は外国人人材を政治から隔離し、経済発展のための道具として扱うことは岩崎教授のおっしゃるとおりである。しかし、社会や人々の生活を考慮に入れる本論文では、外国人人材という観点を加えることは妥当であると思う。なぜなら、国家建設には政治や経済のみならず、社会や人々という観点も考慮に入れる必要があると考えるためだ。本論文は、国家建設を政治経済のみならず、社会発展や人々の生活を含めた国全体の建設と捉えているためである。」と返答した。

都丸潤子教授からは、シンガポールの特殊性が普遍性に与えるインプリケーションについての質問があった。坂口氏は、「シンガポールは特殊な国家であり、本論文で得られた知見をそのまま他国に適用することは不可能だが、個別の 이슈については適用可能である。たとえば、社会保障に関するものである。他国では、現金給付ではなく労働や社会への参加を促す包摂アプローチが議論されている。これに対して、第四章のシンガポールの社会保障研究は、包摂アプローチの脆弱性や運用上の問題を提示することが可能である。」と答えた。

また、都丸教授からは、「リー＝クアンユが提唱した「アジア的価値観」や「アジアの人権」は、本論文が扱うシンガポール社会にどのような影響があったのか」という質問もあった。これに対し、坂口氏は、「シンガポールにおいてアジア的価値観が如実に表れる例は、社会保障分野である。すなわち、シンガポールの社会保障の援助の担い手は家族を基本とするということである。これは、政府が人々の生活を保障する西欧型の社会保障とは異なる

る。」と答えた。

山崎眞次教授からは、「シンガポールにおいて政府に対する信頼度はどのようなものか」との質問があった。ラテンアメリカでは政府の信頼度が低いためにデモなどが起こることと対比したものである。坂口氏は、「これに対して、シンガポールでは政府の政策立案能力や実行力については、人々の間ではある程度の信頼がある。とはいえ、もちろん政府に対する不満も観察されている。」と返答した。さらに、山崎教授は、「メルティング・ポット (Melting pot) 論やサラダ・ボール (Salad bowl) 論の盛んなアメリカ合衆国や人種民主主義 (Racial democracy) のブラジルと比較して、シンガポールの多人種主義 (Multiracialism) における通婚はどうなっているか」という質問を投げた。これに対して、坂口氏は、「シンガポールでは同人種間の婚姻が一般的であるが、異人種間の通婚も近年増えている。」と答えた。

#### (4) 研究の意義と独自性

本論文には、他のシンガポール研究にはない独自性と意義がいくつかある。

##### i) テーマ設定

これまでのシンガポール研究は、支配政党の人民行動党の統治システム、経済成長のメカニズムと外国投資の実態、多民族社会の国民統合などのテーマが主流をなしてきた。そして、経済発展により民主化が進行し、それに加えて社会の少子高齢化・外国人労働者の問題が研究者の大きな関心を集めていった。またそれらの課題は、政府の緊急の重要課題ともなっている。

本論文は、「多人種主義」、「能力主義」、「社会保障制度」、「外国人労働者」の4つの点からシンガポールを分析・考察したものである。前者2つは其々既存研究の蓄積はあるが双方を同時に研究対象として扱った事例はなかったし、十分な検討も行われてはこなかった。後者2つは、現在のシンガポール研究で重要なテーマだが、小論文はあるものの、まだ本格的な研究は世界的にも行われておらず、本論文がこのテーマを纏めて扱ったことは意義が大きい。

また、シンガポールにおいては、学歴と収入は比例関係にあり、援助を受けなければ生活ができない人のほとんどは高学歴所有者ではない。能力主義が社会を自己規定化しているため、能力がないとみなされた人々が自分の力で社会的地位を得て高収入を得ることはほぼ不可能である。この意味で、シンガポールにおいては能力主義と社会保障制度は関連しているため、これら二つを同時に論じた点も意義とオリジナリティがあると考えられる。

##### ii) 分析の視点

既存のシンガポール研究は政府の国民管理、効率的な政策の実施という観点、「上からの、政府からの観点」から、いかに実施されたか、その結果、途上国の国家形成の成功例として、いかに国民が豊かになったかという研究が多い。しかし、本論文はシンガポール社会

の弱者（民族的マイノリティ、低所得層、高齢層、外国人労働者）に焦点をあてたもので、これまでのシンガポール研究にはない視点という点で意義と独自性がある。

また、「他者」である短期滞在外国人が、その国の内部において国家建設に与えた影響を論じた研究は少ない。本論文は、シンガポールにおける外国人人材や新移民を扱い、彼らの役割を論じるとともにシンガポールに与えた影響を分析した。現在、多くの国では移民や外国人人材が大きな問題となり盛んに議論されている。移民を多く受け入れるシンガポールを例にこうした問題を扱ったことは意義がある。

さらに、先進国では少子高齢化が進み、特に日本では介護問題や医療費の問題が議論されている。こうした状況の中で、広義の東アジア型社会保障をとり医療費や社会保障費の財源に関する悩みが小さいシンガポールの社会保障を扱って議論の枠組みを広げたことは、世界中の現代社会の抱える同様な問題とそれに対する取り組みを提示したという点で示唆に富む。

#### iv) 結論と提案

経済発展偏重主義の弊害については先行研究でも述べられているものの、指摘に過ぎず細かな分析を経た本格的なものにはなかった。「成功国家」シンガポールを包摂と排除の観点から弱者に焦点を当てて細やかに分析した結果として、本論文の結論が導き出されている。生き残りのために経済発展に邁進した結果として社会的弱者が生みだされてきたし、彼らを排除してきたために生き残りの危険要素にもなってきたという結論は、本論文の独自性の集約でもあり、成功国家の問題点を包括的に分析したという点で意義が大きい。

また、本論文では最後に坂口氏によるこれからのシンガポールへの期待と提案が述べられている。問題点を指摘し、その構造を解明するだけでなく、シンガポールの将来についての提案にまで思考を発展させて、希望と共に論文を締めくくった点は評価できる。

以上をまとめ、具体的に述べるならば、以下の通りとなる。①「成功国家」シンガポールに、どのような問題があるのか明らかにしたこと、②それを弱者の視点から検討したこと、③本論文のテーマが今後の世界の国々の問題と課題と先取りしたものであること、に意義があるし評価できる。

#### (5) 今後の課題と出版可能性

坂口氏の今後の活躍を期待しつつ、要望を含む課題をいくつか提示する。

##### i) 世界の他の国々に対するインプリケーションについて。

本論文は、シンガポール政治社会に関する優れた研究であるが、一国の地域研究に留まらず、他の国に対するインプリケーションを持つ可能性を持っている。そのため、たとえば、多民族国家としてのマレーシアのブミプトラ政策との比較や、シンガポールと同じ問題を抱える国々に対してシンガポール研究がどのような意味と意義を持つのか、またどのような応用可能性があるのかについて、更に考察することを期待したい。

ii) シンガポールと他国との関わりについて

本論文は、シンガポール国内に焦点を当てているため、坂口氏の関心とは若干離れるが、「外」との関係に対する言及を加えるならば、シンガポール政治社会をより立体的にとらえることが可能となるだろう。華人・華僑や印僑とシンガポールの関わり、そして生き残りの対外面としての安全保障政策についての考察を期待したい。

本論文は非常に優れた内容なので、出版社と連絡を取り、出版準備に入る予定である。

(6) 総合的判断と判定結果

以上、概観したように、平易に書かれた文章は読みやすく、論旨も一貫している。坂口可奈氏の博士学位請求論文「シンガポールの国民統合：「包摂」と「排除」の観点から」は、質量ともに早稲田大学大学院政治学研究科の博士論文審査基準をクリアするものであり、審査員全員一致で、「合格」と判定した。

坪井善明

都丸潤子

山崎眞次

岩崎育夫